

寺田寅彦

写生紀行





写  
生  
紀  
行

去年の春から油絵の稽古けいこを始めた。冬初めごろまでに小さなスケッチ板へ二三十枚、六号ないし八号の画布へ数枚をかいた。寒い間は休んでことし若葉の出るころからこの秋までに十五六枚か、事によると二十枚ほどの画布を塗りつぶした。これらのものの大部分はみんなうちの庭や建物の一部を写生したものである。

静物もかかないわけではなかった。しかし花を生けて写生しようと思うとすぐにしおれたり、またこれに反して勢いのいいのは日ごとの変化があまりにはげしくて未

熟なものの手に合わなかった。壺つぼやりんごもおもしろくない事はないが、せっかく「生きた自然」の草木が美しく、それに戸外が寒くなくていい時候に、室内の「死ナチユール・モルトんだ自然」と首っ引きをするのももったいないような気がした。静物ないし自画像などは寒い時のために保留するとうような気もあって、暖かいうちはなるべく題材を戸外に求める事に自然となってしまうた。もつとも戸外と言ってもただ庭をあちらから見たりこちらから見たり、あるいは二階か近所の屋根や木のこずえを見たところなど、もしこれがほんとうの画家ならば始めから

てんで相手にしないようなものを、無理に拾い出し、切り取っては画布に塗り込むのであった。それだから、どの絵にもどの絵にも同じ四つ目垣よめがきのどこかの部分が顔を出していたり、同じ屋根がどこかに出っ張ったりしている事になるのは免れ難い。

それでも私にとってはやはりおもしろくない事はなかった。たとえば四つ目垣よめがきでも屋根でも芙蓉ふようでも鶏頭けいとうでも、いまだかつてこれでやや満足だと思ふようにかけた事は一度もないのだから、いくらかいてもそれはいつでも新しく、いつでももちがった垣根や草木である。おそらく一

生かいていてもこれらの「物」に飽きるような事はあるまいと思う。かく事には時々飽きはしても。

展覧会などで本職の画家のかいた絵を見ると、美しい草木や景色や建築物やが惜しげもなく材料に使われていゝる。今の自分から見るとこれらの画家は実にうらやましい有福な身分だと思ふ。世の中に何がぜいたくだと言つて、このような美しく貴重な自然を勝手自在にわが物同様に使用し時には濫費してもいいという、これほどのぜいたくは少ないと思ふ。これに匹敵するぜいたくはおそらくただ読書ぐらいのものかもしれない。

そんな絵を見るたびに、きつと自分も門から外へ出てかいてみたくなるのである。一步門を出さえすれば、ついその路地にでも川岸にでも電車停留場にでも、とにかくうちの庭とは比較にならないほどいい題材が、もったいないように無雑作に、顧みられずにころがっている。わざわざ旅費を出して幾日も汽車を乗り回す必要などはないように思われる。しかしどうもこの東京の街頭に画架をすえて、往来の人を無視してゆっくり落ち着いて、目を細くしたり首をひねったりする勇氣は——やってみたら存外あるかもしれないが、考えてみただけではどう



もなさそうに思われる。せめて郊外へでも行けばそういう点でいくらかぐあいのいい場所があるだろうと思つたが、しかし一方でまたあまり長く電車や汽車に乗り、また重いものをさげて長途を歩くのは今の病気にさわるという懸念があつた。

ことしの秋になつて病気のぐあいがだいぶよくなつたし、医者も許しましたすすめてくれたので、どこかへためしに行つてみようと思つたと、あいにくなもので時候はずれの霖雨りんうがしばらくつづいて、なかなか適当な日は来なかつた。やっと天氣がよくなつて小春の日光の誘惑を感じ

ずるころには、子供が病気になっていてどうもそういう心持ちになれなかった。

十月十五日。朝あまり天気が朗らかであったので急に思い立って出かける事にした。このあいだM君と会った時、いつかいつしよに大宮おおみやへでも行ってみようかという話をした事を思い出して、とにかく大宮まで行ってみる事にした。絵の具箱へスケッチ板を一枚入れて、それと座ぶとん代わりの古い布切れとを風呂敷ふろしきで包み隠したのをかかえて市内電車で巢鴨すがもまで行った。省線で田端たばたまで

行く間にも、田端で大宮行きの汽車を待っている間にも、目に触れるすべてのものがきょうに限って異常な美しい色彩で輝いているのに驚かされた。停車場のくすぶつた車庫や、ペンキのはげかかったタンクやてんてつだい転轍台のようなものまでも、小春の日光と空気の魔術にかかって名状のできない美しい色の配合を見せていた。それに比べて見ると、そこらに立っている婦人の衣服の人工的色彩は、なんとなくこせこせした不調和な継ぎ合わせもののように見えた。こんなものでも半年も戸外につるして雨ざらしにして自然の手にかけたら、少しは落ちついたいい色

調になるかもしれないと思ったりした。実際洗いざらしの鉄道工夫の青服などは、適当な背景の前には絵になるものの一つである。ヴェニスของ美しさも半分は自然のためによごれさらされているおかげである。

乗り込んだ汽車はどこかの女学校の遠足で満員であった。汽車が動きだすと一団の生徒らは唱歌を歌いだした。それはなんの歌だかわからないが、二部の合唱で、静かな穏やかな清らかな感じのするものであった。汽車のゴーゴーという単調な重々しい基音の上に、清らかに澄みきった二つの音の流れがゆるやかな拍子で合ったり離れ

たり入り乱れて流れて行く。窓の外にはさらに清く澄み  
きった空の光の下に、武蔵野むさしのの秋の色の複雑な旋律とハ  
ーモニ―が流れて行った。

大宮駅でおりて公園までぶらぶら歩いた。駅前の町に  
は「螢ほたるご五家宝かぼう」というお菓子を売る店が並んでいる。

この「五家宝」という名前を見ると私の頭の中へは、い  
つでも埼玉さいたま県の地図が広げられる。そうしてあのねちね  
ちした豆の香をかぐような思いがする。

ある町の角かどをまがって左側に蠟ろう細工さいくの皮膚病の模型を  
並べた店が目についた。人間の作ったあらゆる美しくな

いものの中でもこれくらい美しくないものもまれである。きょうのような日に見るとその醜さがさらに強められる、こんなものや菊人形などというものに比べるとたとえば屠牛場とぎゆうじょうの内部の光景のほうはまだいくらか美しいくらいだと思う。牛や豚の残骸ざんがいはあれでも自然の断片である。

悪い醜い病をなおす薬を売るために、病の醜さを世に宣伝する、このやり方が今の新聞や婦人雑誌のやり方によく似ている。その主旨ははなはだめでたい。しかしそういう方法ではたして世の中の醜い病が絶やさされるもの

であろうか。薬はよく売れても、おそらく病のほうはかえってますます広がりはしないだろうか。もう少し積極的なあるものの力でそういう病にかからない根本的素質を養う事はできないものだろうか。

公園の入り口まで行ってちよつと迷った。公園の中よりは反対の並み木道を行ったほうが私の好きな画題は多いらしく思われた。しかしせつかくここまで来て、名高いこの公園を一見しないのも、あまりに世間というものに申し訳がないと思つて大きな鳥居をくぐつてはいつて行つた。

いつのまにか宮の裏へ抜けると、かなり広い草原に高くそびえた松林があつて、そこにさっきの女学生が隊を立てて集まっていた。遠くで見ると草花が咲いているように美しくかつた。

腹がへつたので旗亭きていの一つにはいつて昼飯を食つた。時候はずれでそして休日でもないせいか他にお客は一人もなかつた。わざわざ一人前の食膳しょくぜんをこしらえさせるのが気の毒なくらいであつたが、しかし静かで落ち着いてたいへんに気持ちよかつた。小さな座敷の窓には柿かきの葉の黄ばんだのが蠟石ろうせきのような光沢を見せ、庭には赤



いダーリアが燃えていた。一つとして絵にならないものはないように見えた。

飯を食いながら女中の話を聞くと、せんだってなんとかい博士がこの公園を見に来て、これはたいへんにいい所だからこの形勝を保存しなければいけないという事になり、さらに裏手の丘までも公園の地域を拡張する事になった。「そうになると私どもはここを立ちのかなければなりません」という。非常に結構な事だと思った。近年急に襲うて来た「改造」のあらしのために、わが国の人々の心に自然なあらゆるものが根こぎにされて、そのか

わりにペンキ塗りの思想や蠟細工ろうさいくのイズムが、新開地の雑貨店や小料理屋のように雑然と無格好むかつこうに打ち建てられている最中に、それほど思われぬ天然の風景がほうぼうで保存せられる事になるのは、せめてもの事である。なろう事なら精神的の方面でもどこかの山や森に若干の形勝を保存してもらいたい。こんな事を考えながら一わんの鯉こいこくをすすってしまった。

「絵をおかきになるなら、向こうの原っぱへおいでになるといい所がありますよ」と教えられたままにそのほうへ行ってみる。近ごろの新しい画学生の間には重宝がら

れるセザンヌ式の切り通し道の赤土の崖がけもあれば、そのさきにはまた旧派向きの牛飼い小屋もあった。いわゆる原っぱへ出ると、南を向いた丘の斜面の草原には秋草もあれば桜の紅葉もあったが、どうもちょうどぐあいのない所をここだと思い切りにくいので、とうとうその原っぱを通り越して往還路へおりてしまった。道ばたにはところどころに赤く立ち枯れになった黍きびの畑が、暗い森を背景にして、さまざまの手ごろな小品を見せていた。しかしもう少しい所をと思って歩いているうちに、とうとうぐるりと一回りして元の公園の入り口へ出てしまっ

た。

入り口の向こう側に妙な細工もののような庭園があつた。その中に建てた妙な屋台造りに生き人形が並べてあつた。鞍馬山くらまやまで牛若丸うしわかまるが天狗てんぐと剣術をやっているのがあつた。その人形の色彩から何からがなんとも言えない陰惨なものである。この小屋の上にそびえた美しい老杉ろうしんまでがそのために物すごく恐ろしく無気味なものに感ぜられた。なんのためにわざわざこんなものが作つてあるのか全くわからない。

秋の日がだんだん低く落ちて行つた。あまりゆるゆる

しては、せつかくここまで来たのに一枚もかかずに  
帰る事になりそうなので、行き当たり次第に並み木道を  
左へ切れて行って、そこの甘藷畑かんしよばたけの中の小高い所にと  
もかくも腰をかけて絵の具箱をあけた。なんとなしに物  
新しい心ときめきといったようなものを感じた。それ  
は子供の時分に何か長くほしがっていた新しいおもちゃ  
を手に入れて始めてそれを試みようとする時、あるいは  
何かの研究に手をつけて、始めて新しい結果の曙光しよこうがお  
ぼろに見え始めた時に感じるのと同じようなものであつ  
た。天地の間にあるものはただ向こうの森と家と芋畑と

そして一枚のスケッチ板ばかりであった。

向こうの小道をまれに百姓が通ったが、わざわざ自分の所までのぞきに来る人は一人もなかった。

どれだけ時間が経過したかまるでわからなかった。ただ律儀な<sup>りちぎ</sup>太陽は私にかまわずだんだんに低くたれ下がって行って景色の変化があまりに急激になって来るので、いかげんに切り上げてしまわなければならなかった。軽く興奮してほてる顔をさらに強い西日が照りつけて、ちようど酒にでも微酔したような心持ちで、そしてからだだが珍しく軽快で腹がいいぐあいにはへっていた。

停車場まで来ると汽車はいま出たばかりで、次の田端<sup>たばた</sup>止まりまでは一時間も待たなければならなかった。構外のWCへ行ってその低い柵越<sup>さくご</sup>しに見ると、ちようどその向こう側に一台の荷物車があつて人夫が二人その上にあがつて材木などを積み込んでいた。右のほうのバックには構内の倉庫の屋根が黒くそびえて、近景に積んだ米俵には西日が黄金のように輝いており、左のほうの澄み通った秋空に赤や紫やいろいろうの煙が渦卷<sup>うずま</sup>きのぼつているのがあまりに美しかったから、いきなり絵の具箱を柵<sup>さく</sup>の上に置いてWCの壁にもたせかけ大急ぎのスケッチを

しようとした。板はただ一枚しかなかったから、さっきの絵の裏へきわめて大まかにかき始めた。

場所が場所だけに見物がだんだん背後に集まって来た。車夫もくれば学生も来ているようであった。しかし大急ぎでこの瞬間の光彩をつかもうとしてもがいている私には、とてもそんな人たちにかまっているだけの余裕はなかった。それでも人々の言葉は時々耳にはいる。私  
が新しくブラシをおろすたびに、「煙だよ」とか「電柱  
だよ」とか一々説明してくれる人もあって、なんだか少し  
背中や首筋のへんがくすぐったいような気持ちもし



た。そういう人の同情に報いるためには私の絵がもう少し人の目にうまく見えなければ気の毒だと思うのであった。

ほんのだいたいの色と調子の見当をつけたばかりで急いで絵の具箱を片付けてしまった。さてふり返って見るともうだれもいなかった。人々の好奇心の目的物はやっぱりこの私ではなくて「絵をかいてるどこかの人」であったのである。このぶんなら東京の町中でもどうやら写生ができそうな気もした。

行きにいっしょであった女学校の一団と再び同じ汽車

に乗り合わせたが、生徒たちは行きとはまるで別人のよ  
うに活発になっていた。あの物静かな唱歌はもう聞かれ  
なくなつて、にぎやかなむしろ騒々しい談笑が客車の中  
に沸き上がった。小さなバスケットや信玄袋しんげんぶくろの中から  
取り出した残りものの塩せんべいやサンドウィッチを片  
付けていた生徒たちの一人が、そういうものの包み紙を  
細かく引き裂いては窓から飛ばせ始めると、風下の窓か  
ら手を出してそれを取ろうとするものが幾人も出て来  
た。窓ぎわにすわっていた若い商人ふうの男もいっしょ  
になつてそのような遊戯を享樂していた。この暖かい小

春の日光はやはり若い人たちの血のめぐりをよくしたのであろう。このような血のめぐりのいい時に、もしほんとうの教育、人の心を高い境地に引き上げるような積極的な教育が施されたら、どんなに有効な事であらう。

元気のいい人たちの中には少数の沈んだ顔もあった。けんかでもしたのかハンケチを顔に押しあてて泣いているのもあった。これも小春の日光の効果の一面かもしれない。なかつた。

途中から乗った学生とも職工ともつかぬ男が、ベンチの肱掛ひじかけに腰をおろして周囲の女生徒にいろんな冗談を

言って笑わしていた。「学校はどこ……小石川こいしかわ?、○  
○? △△?……」などと女学校の名前らしいものを列  
挙していたが生徒のほうではだれもはつきりした答えを  
与えないでただ笑っていた。どうして小石川という見当  
をつけたかが私には不思議に思われた。それぞれのエキ  
スパートが品物の産地を言い当てるように、この男には  
やはり特別な眼識が備わっているのかと思われた。そう  
言われるとよくなるほどなんとなく小石川らしくも思われな  
い事はなかった。

田端たばたへ着くともういよいよ日が入りかけた。夕日に染

められた構内は朝見た時とはまるでちがったさらにさらに美しい別の絵になっていた。数多い展覧会の絵の中で一枚もこの美しい光景を描いたものを見ないのが不思議に思われた。しかしいくら日本の鉄道省でも画家の写生を禁じているとは考え得られなかった。

十月十六日、日曜。きのうの漫歩がからだにも精神にも予想以上にいい効果があったように思われたので、きょうもつづけて出かけてみる事にした。きのう汽車の窓から見ておいた浦和うらわ付近の森と丘との間を歩いてみよう

と思ったのである。きのう出る時にはほとんどなんのあてもなしであったのが、ただ一度の往復で途中へ数えきれないほどの目当てができてしまった。自分らの研究の仕事でもよく似た事がある。ただ空で考えるだけではテーマ題目はなかなか出て来ないが、何か一つつつき始めるとその途中に無数の目当てができすぎて困るくらいである。そういう事でも、興味があるからやるといふよりは、やるから興味ができる場合がどうも多いようである。

きょうは日曜で汽車は不合理な不正当な満員であった。ほとんど身動きもできないほどで、出る時に出られ

るかどうかと思うくらいであった。網棚あみだなに絵の具箱をのせる空所もなかったのでベンチにのせかけて持っているうちに、誤って取り落とすと隣に立っていた老人の足に当たった。老人はちよつとおこつたような顔を見せたが、驚いてあやまったらすぐに心が解けたようである。私はこんな時にいつでも思う事がある。自分はなぜ平気ですましている、もし面と向かっておこられたら、そんな所に足をもって来ているやつがあるか気をつけろとどなりつけるだけの勇気がないのだらう。この勇気がなくてはとても今の世間をのんびりした気持ちでは渡って行かれ

ないらしい。昔は命を的にしなければ、うっかり誤っても人の足も踏めず、悪口も無論言われなかった。私の血縁の一人は夜道で誤って突き当たった人と切り合って相手を殺し自分は切腹した。それが今では法律に触れない限り、自分のめがねで見て気に入らない人間なら、足を踏みつけておいて、さかさまにののしるほうが男らしくていいのである。そういう事を道楽のようにして歩いている人格者もある。それで私は自分の子供らの行く末を思うなら、そういうふうになら教育しなければさきで困るのではないかと思う事もしばしばある。



「赤羽あかばねで今電気をたくところをこさえているが、それができるとはや……」こんな事を話している男があつた。電気をたくという言葉がおもしろかつた。日本語もこういうぐあいに活用させる人ばかりだったら、字を見なければわからないあるいは字を見ても読めないような生硬な術語などをやめてしまって、もう少し親しみのあるものに代える事ができそうである。国語調査会とかいうものでこういういい言葉を調べ上げたらよさそうに思われた。

浦和の停車場からすぐに町はずれへ出て甘藷さつまいもや里芋

やいろいろの畑の中をぶらぶら歩いた。とある雑木林の  
 出っ鼻の落ち葉の上に風呂敷ふろしきをしいてすわり込んで向か  
 いの丘を写し始めた。平生はただ美しいとばかりで不注  
 意に見過びようごしている秋の森の複雑な色の諧調かいちょうは全く臆おく  
 病びような素人しろうと絵かきを途方にくれさせる。まだ目の鋭くな  
 いわれわれ初学者にとつてはおそらくこれほどいい材料  
 はあるまい。しかし黒人くろうとになればたぶんただ一面のちや  
 ぶ台、一握りの卓布の面の上にもやはりこれだけの色  
 彩の錯綜さくそうが認められるのであろう。それほどになるのも  
 考えものであるとも思うが、しかしたとえ楽しみ事にし

ろやっぱりそこまで行かなければつまらないとも思う。

畑に栽培されている植物の色が一切れごとにそれぞれ一つも同じものはない。打ち返されて露出している土でも乾燥の程度や遠近の差でみんなそれぞれに違った色のニュアンスがある。それらのかなりに不規則な平面的分布が、透視パースペクティブ法という原理に統一されて、そこに美しい幾何学的の整合を示している。これらの色を一つ取りかえても、線を一つ引き違えても、もうだめだという気がする。

十歳ぐらいの男の子が二人来て後ろのほうで見えてい

た。「いいねえ」「いい色だねえ」などと言っているのがやはり子供らしい世辞のように聞こえた。遠慮深い小さな声で言っているのであったがさすがにきのうの大宮の車夫とはちがって、絵の中の物体を指摘したりしないで「色」を言ったりするところがそれだけ新しい時代の子供であるのかもしれない。

ここはいいかげんに切り上げて丘の上の畑の中を歩いた。黍きびを主題にしたのが一枚かきたかったがどうもぐあいのいい背景が見つからなかった。同じ畑の中をなんべんも往復しているのを少し離れた畑で働いていた農夫が

怪しんでいるようで少し気が引けた。自分が農夫になつて見た時にこの絵の具箱をぶら下げて歩いている自分がいかにも東京ののらくら者に見えるので心細かった。とうとう鉄道線路のそばの崖がけの上に腰かけて、一枚ぎつとどうにか書き上げてしまった。

十月十八日、火曜。午後に子供を一人つれて、日暮里にっぽりの新開町を通つて町はずれに出た。戦争のためにできたらしい小工場が至るところに小規模な生産をやっている。ともかくも自分の子供の時にはみんな貴重な舶来物

であった品物が、ちやんとここらのこんな見すばらしい工場できてきれいなラベルなどはられて市場に出てくるのであろう。それだけでも日本がえらくなつたには相違ない。これでもし世界じゅうの他の国が昔のままに「足踏み」をして、日本の追いつくのを待っていてくれたらさぞいいだろう。

町はずれに近く青いペンキ塗りの新築が目についた。それを主題にしたスケッチを一枚かこうと思つて適当な場所を捜していると、ちやんとした本物の画学生らしいのが二人、同じ「青い家」を取り入れて八号ぐらいの画

布をかいているのに出会った。一人は近景に黍の行列を  
入れ一人は溝みぞにかかった板橋を使っていた。一人のは赤  
黒く一人のは著しく黄色っぽい調子が目についた。

私は少し行き過ぎて、深い掘割溝ほりわりみぞの崖がけの縁にすわって  
溝渠こうきよと道路のパースペースをまん中に入れたのを描  
いた。近所の子供らが入り代わり何人となくのぞきに来  
た。このへんの子供にはだいたい専門的の知識があつて「チ  
ューブ」だの「パレット」だのという言葉を使っている  
のが聞こえた。そして浦和へんの子供とはすべての質が  
違っていた。

歸りに、腰に敷いていた大きな布切れのちりを払おうとした拍子に取り落とした。それが溝の崖のずっと下のほうに引っかかって容易には取り上げる事ができないので、そのままにして歸った。この布切れが今でもやっぱり引っかかっているかもしれない。この日かいた絵を見ると、絵の下のほうにこの布切れがぶら下がっているよな気がしてしかたがない。人殺しをした人間のある場合の心持ちはどこかこれと似たものがあるのかもしれない。(中略)



十月二十九日、土曜。王子電車おうじで小台おだいの渡しまで行つた。名前だけで想像していたこの渡し場は武蔵野むさしのの尾花の末を流れる川の岸のさびしい物哀れな小駅であつたが、来て見るとまず大きな料理屋兼旅館が並んでいゝ間にペンキ塗りの安西洋料理屋があつたり、川の岸にはいゝろんな粗末な工場があつたり、そして猪苗代湖いなわしろこの水力で起こした電圧幾万幾千ボルトの三相交流が川の高い空をまたいでいるのに驚かされた。

先月からの雨あらかわに荒川があふれたと見えて、川沿いの草木はみんなどろみず泥水をかむつたままに干上がって一様に情け

ない灰色をしていた。全色盲の見た自然はあるいはこんなものだろうかという気がして不愉快であった。

高压電線の支柱の所まで来ると、川から直角に掘り込んで来た小さな溝渠こうきよがあった。これに沿うて二条のトロのレールが敷いてあって、二三町隔てた電車通りの神社のわきに通じている。溝渠こうきよの向こう側には小規模の鉄工場らしいものの廃墟はいきよがある。長い間雨ざらしになっているらしい鉄の構造物はすっかり赤さびがして、それが青いトタン屋根と美しい配合を示している。煙突なども倒れかかったままになってなんとなく荒れ果てたながめで

ある。この工場のために掘ったかと思われる裏のため池には掘割溝ほりわりみぞから川の水を導き入れてあった。その水門がくずれたままになっているのも画趣があった。池の対岸の石垣いしがきの上には竹やぶがあつて、その中から一本の大榎おおえのきがそびえているが、そのこずえの紅や黄を帯びた色彩がなんとも言われなく美しい。木の影には他の工場の倉庫らしい丹塗にぬりの単純な建物が半面を日に照らされて輝いている。その前には廃工場のみぎわに茂った花すすきが銀のように光っている。

溝のこつちに画架をすえて対岸の榎と赤い倉庫とすす

きとの三角形を主題にしてかき始めた。

かいているすぐそばには新しい木の香のする材木が積んであった。また少し離れた所には大きな土管がいくつも砂利じやりの上にくろがしてあった。私がそこへ来る前から、中学の一年か二年ぐらいと見える子供がただ一人材木の上に腰をかけていたが、私がかき始めるとそばへ来ておとなしく見ていた。そしていつまでもそこを離れないで見ているのであった。

そのうちに土方のようなものが二三人すぐ背後のほうへ来て材木の上に腰かけて何かしきりに話し合っている

た。だれかそこに来るはずの人——それはたぶん親方か何かはまだ来ていないのを待ち遠しがってうわさをして  
いるらしかった。そばに「絵をかいている男」などはま  
るで問題にならないらしいほど熱心に話し合っていた。

そのうちに荷馬車の音がおおぜいの人夫がやって  
来て、材木をころがしては車に積み始めたので、私はし  
ばらく画架を片よせて避けなければならなかった。そこ  
で少し離れた土管に腰をかけて煙草たばこを吸いながらかきか  
けの絵の穴を埋める事を考えていた。

人夫の中には絵をのぞきに来るものもあった。そして

いろいろ人を笑わせるつもりらしい粗暴なあるいは卑猥ひわいな言語を並べたりした。「あの曲がった煙突をかくとい  
いんだがなあ」などとという者もあった。「文展へ行つて  
見ろ、島村観山とか寺岡広業とか、ああいうのはみんな  
大家だぜ、こんなのはちがわあ」「あれでもどっかへ  
持って行きやあ、三十円や五十円にやあなるんだよ」な  
どいうのも聞こえた。

さっきの子供はいつまでもそこいらを離れずにぶらぶ  
らしていた。遠足にしてはただ一人というのもおかしか  
った。よほど絵が好きなので、こうして油絵のできて行

く道筋を飽きずにおしまいまで見届けようとしているのかと思つてもみた。

一度去つた荷車と人夫は再び歸つて来た。彼らの仕事しながらの会話によつて対岸の廃工場が某の鑄物工場であつた事、それがようやくしゅんせい竣成してよいよ製造を始めようとするとたんに経済界の大變動が突発してそのまま廃墟はいきよになつてしまつた事などを知つた。

絵の具箱を片付けるころには夕日が傾いて廃墟のみぎわの花すすきは黄金の色に染められた。そこに堆積たいせきした土塊のようなものはよく見るとみな石炭であつた。ため

池の岸には子供が二三人釣りをたれていた。熔炉ようろの屋根には一羽のからすが首を傾けて何かしら考えていた。

絵として見る時には美しくおもしろいこの廃墟の影に、多数の人の家の悲惨な運命が隠れているのを、この瞬間まで私は少しも考えないでいた。一度気がつくともう目の前の絵は消えてそこにはさまざまな悲劇の場面が現われた。

利欲のほかには何物もない人たちが戦時の風雲に乗じていろいろなきわどい仕事に手を出し、それがほとんど予期されたはずの変動のために倒れたのはどうにもしかた



がないとしても、そういう人の妻子の身の上は考えてみれば気の毒である。

突然すぐ前の溝みぞの中から呼びかけるものがある。見ると川のほうから一艘そうの荷船がいつのまにかはいって来ている。市中の堀ほりなどでよく見かけるような、船を家として渡って行く家族の一つである。舳へそぎに立っている五十近い男が今呼びかけたのは私ではなくて、さつきから私の絵を見ていた中学生であった。

子供に関するすべての事が稲妻のひらめくように私の頭の中に照らし出された。きょうは土曜である。市の中

学からおそらく一週間ぶりに帰った子供はこの一夜を父母と同じ苦とまの下で明かそうとするのである。それを迎えに来た親と、待ちくたびれた子供とが、船と岸とで黙って向かい合っているさびしい姿を見比べた時に、なんだか急に胸のへんがくすぐったくなって知らぬまに涙が出ていた。なんのための涙であったか自分でもわからな  
い。

絵の世界はこの上もなく美しい。しばらくこの美しい世界にのがれて病を養おうと思っても、絵の底に隠れた世の中が少しの心のすきまをうかがってすぐに目の前に

迫ってくる。これは私の絵が弱いのか世の中が強いのか、どっちだかこれもよくわからない。

一つの工場が倒れる一方に他の工場は新たに建てられている。さっきの材木もやはりどこかの工場のである事が人夫の話から判断された。工業が衰えたわけでもないらしい。個体が死んでも種スペシースが栄えれば国家は安泰である。個体の死に付随する感傷的な哀詩などは考えないほうが健全でいいかもしれない。

工場のみならず至るところに安普請の家が建ちかかっているのがこのあいだじゅう目についていた。ひとところ

騒がしかった住宅難の解決がこんなふうにしてないくずいについているかと思われた。まだ荒壁が塗りかけになって建て具も張ってない家に無理無体にか財を持ち込んで、座敷のまん中に築いた夜具や箆たんすの胸壁の中で飯を食っている若夫婦が目についたりした。

新開地を追うて来て新たに店を構えた仕出し屋の主人が店先に頬杖ほおづえを突いて行儀悪く寝ころんでいる目の前へ、膳ぜんわん碗の類を出し並べて売りつけようとしている行商人もあつた。そこらの森陰のきたない藁屋わらやの障子の奥からは端唄はうたの三味線をさらっている音も聞こえた。こうし

てわが大東京はだらしなく無設計に横に広がって、美しい武蔵野むさしのをどこまでもと蚕食して行くのである。こんなにしなくても市中の地の底へ何層楼の آپार्टメントでも建てたほうがよさそうに思われる。そうしないと、おしまいには米や大根を地下室の棚たなで作らなければならぬい事になるかもしれない。

ベルリンの郊外でまだ家のちっとも建たない原野に、道路だけが立派にみがいたアスファルト張りにできあがって、美術的なランプ柱が行列しているのを、少しばかりかしいようにも感じたのであったが、やっぱりああし

なければこうなるのは当たりまえだと思われた。

思うに「場末の新開町」という言葉は今の東京市のほとんども全部に当てはまる言葉である。

十一月二日、水曜。渋谷しぶやから玉川電車たまかわでんしゃに乗った。東京の市街がどこまでもどこまでも続いているのにいつもながら驚かされた。

世田せたが谷やという所がどこかしら東京付近にあるという事だけ知って、それがどの方面だかはきょうまでつい知らずにいたが、今ここを通って始めて知った。なるほど

兵隊のいそうなという事が町に並んでいる店屋の種類からも想像されるのであった。

こまざわむら

駒沢村というのがやはりこの線路にある事も始めて知った。頭の中で離れ離れになってなんの連絡もなかった。いろいろの場所がちょうど数珠じゆずの玉を糸に連ねるように、電車線路に貫ぬかれてつながり合って来るのがちよつとおもしろかった。

学校で教わったり書物を読んだりして得た知識もやはり離れ離れになりがちなものである。ただ自分が何かの問題にまともにぶつかって、そのほうの必要からこれら

の知識を通り抜ける時に、すべての空虚な知識が体験の糸に貫ぬかれて始めて生きて連結して来る。これと同じようなものだと思う。

農科の実科の学生が二三人乗っていた。みんな大きな包みのようなものを携えている。休日でもないのにどこへ行くのだろうと思って気をつけていた。すると途中からもう一人同じ帽章をつけたのが乗り込んで、いきなり入り口に近く腰掛けていた一人の肩をたたき「オイ、どうした」と声をかけた。その言葉の響きのある機微な特徴で、私はこの学生が固有の日本人でない事を知った。



気をつけてみると、つい私の隣にかけていた連れの一  
人の読んでいる新聞が漢字ばかりのものであった。容貌ようぼうか  
ら見るとどうもシナではなくて朝鮮から来た人たちらし  
く思われた。

玉川たまかわの川原では工兵が架橋演習をやっていた。あまり  
きらきらする河原には私の捜すような画題はなかったの  
で、川とこれに並行した丘との間の畑地を当てもなく東  
へ歩いて行った。広い広い桃畑があるが、木はもうみん  
な葉をふるってしまつて、果実を包んだ紙の取り残され  
たのが雨にたたけてくつついている。少しはなれて見る

と密生したこずえの色が紫色にぼうとけむったように見える。畑の間を縫う小道のそばのところどころに黄ばんだ榛はんの木のこずえも美しい。

丘の上へ登ってみようと思つて道を捜していると池のようなもののそばに出た。さざ波一つ立たない池に映つた丘の森の色もまたなく美しいものである。みぎわに茂る葭あしの断え間に釣つりをしてる人があつた。私の近づくと足音を聞くと振り返つてなんだかひどく落ち付かぬふうを見せた。もしこの池で釣つり魚りをする事が禁ぜられてでもいるか、そうでないとすれば、この人はやはり自分のよ

うなたちの、言わばすわりの悪い良心をもった人間だろうと思われた。そして悪い事をしていなくても、人から悪い事をしていられると思われはしないかと思うと同時に、実際悪い事をしていられると同じ心持ちになるというたちの男かもしれないと思った。そして同病相哀れむ心から私は急いでそこを通り過ぎねばならなかった。

ようやく丘の下の往還に出ると、ちようどそこから登る坂道があった。登りつめるとききれいな芝を植えた斜面から玉川沿いの平野一面を見晴らす事ができた。しかしそれよりも私の目をひいたのは、丘の上の畑の向こう側

に柿かきの大木が幾本となく並んでその葉が一面に紅葉しているのであった。その向こうは一段低くなっている。見えて柿のこずえの下にある家の藁葺わらぶき屋根やねだけが地面にのっかっているように見えていた。ここで画架を立てて二時間余りを無心に過ごした。

崖がけをおりて停車場のほうへ行く道ばたには清らかな小流れが音を立てて流れていた。小川の岸に茂るいろいろの灌木かんぼくはみんなさまさまの秋の色彩に染められていた。小川と丘との間の一帯の地に、別荘らしい家がところどころに建っている。後ろには森を背負い、門前の小川に

は小橋がかかっている、なんとなしに閑寂な趣のあるいい土地だと思う。しかしこの小川の流れが衛生のほうから少し気になる点もあった。

電車は小学校の遠足のかえりでいっぱいであった。よんどころなく車掌台に立って外を見ていると、ある切り通しの崖がけの上に建てた立派な家のひさしが無残に暴風にこわされてそのままになっているのが目かどについた。液体力学の教えるところではこういう崖の角は風力が無限大になって圧力のうんと下がろうとする所である。液体力学を持ち出すまでもなく、こういう所へ家を建てるのは

考えものである。しかしあるいは家のほうが先に建っていたので切り通しのほうがあとにできたかもしれぬ。そうだとすると電車の会社はこの家の持ち主に明白な損害を直接に与えたものだという事が科学的に立証されるわけである。これによく似た場合は物質的のみならず精神的の各方面にも至るところにあるが損害をかけた人も受けた人も全然その場合の因果関係に心づかない事が多いように思われる。そのおかげでわれわれは枕まくらを高くして眠っていられる。そして言論や行動の自由が許されている。春秋しゅんじゅうの筆法が今は行なわれないのである。

そうでなければこんな事もうっかりは言われぬ。

世田が谷近くで将校が二人乗った。大尉のほう少佐に対して無雑作な言語使いでしきりに話しかけていた。少佐は多く黙っていた。その少佐の胸のボタンが一つはとれて一つはとれかかっているのが始終私の気にかかった。

同乗の小学生を注意して見ると、もちろんみんな違った顔であるが、それでいて妙にみんなよく似た共通の表情がある。軍人を見てもやっぱりそうであるらしい。これがどうしてそうなるかを突きとめる事はある人々にき

わめて重大な問題であると思われる。われわれの見た蟻ありや蜜蜂みつばちのように個体の甲と乙との見分けがつかなくならなければその「集団」はまだ本物になっていないと思う。

十一月十日、木曜。池袋いけぶくろから乗り換えて東上線とうじょうせんの成増なります駅まで行った。途中の景色が私には非常に気にいった。見渡す限り平坦へいたんなようであるが、全体が海拔幾メートルかの高台になっている事は、ところどころにくぼんだ谷があるのので始めてわかる。そういう谷の所にはきまっぴ松や雑木の林がある。この谷の遠く開けて行くさきには



大河のある事を思わせる。畑の中に点々と碁布した民家は、きまっただように森を背負って西北の風を防いでいる。なるほど吹きさらしでは冬がしのがれまい。

私の郷里のように、また日本の大部分のように、どちらを見てもすぐ鼻の先に山がそびえていて、わずかの低地にはうっとうしい水田ばかりしかない土地に育ったものには、このような景色は珍しくて、そしていかにも明るく平和にのびのびした感じがする。これと言って特にさすものがないために一見単調なように見えるが、その中にかなり複雑な、しかし柔らかな変化は含まれている。

あまりに強い日常の刺激に疲れたものの目にはこのよう  
なながめがまたなくありがたい。

米を食って育っていながらこういう事をいうのはすま  
ないが、水田というものの景色はなぜか私には陰気な不  
健康な感じを与える。またいくら広くてもその面積はわ  
れわれの下駄げばきの足を容いれる事を許さないために、な  
んとなく行き詰まった窮屈な感じを与えるが、畑地なら  
ば実際どこでも歩いて行けば行かれると思うだけでも自  
由なのびやかな気がする。

ねぎや大根が至るところに青々として、麦はまだわず

かに芽を出した所があるくらいであった。このあいだま  
で青かったはずの芋の葉は数日来の霜に凍いててすっかり  
うだったようになったのが一つ一つ丁寧に結び束ねてあ  
った。

成増でおりて駐車場の近くをあてもなく歩いた。とあ  
る谷を下った所で、曲がりくねった道路と、その道ばた  
に榛はんの木が三四本まっ黄に染まったのを主題にして、や  
や複雑な地形に起伏するいろいろの畑地を画布の中へ取  
り入れた。

帰りに汽車の窓から見た景色は行きとは見違えるほど

いっそう美しかった。すべてのものが夕日を浴びて輝いている中にも、分けて谷の西向きの斜面の土の色が名状のできない美しいものに見えた。線路に沿うたとある森影から青い洋服を着て、ミレーの種まく男の着ているような帽子をかぶった若者が、一匹の飴色あめいろの小牛を追うて出て来た。牛の毛色が燃えるように光って見えた。それはどうしてもこの世のものではなくてだれかの名画の中の世界が眼前に生きて動いているとしか思われなかった。

ほとんど感傷的になって見とれている景色の中には、

こんなに日が暮れかかってもまだ休まず働いている農夫の家族が幾組となくいた。赤子をおぶって、それをゆさぶるような足取りをして、麦の芽をふんでいる母親たちの姿が哀れに見えた。こうして日の暮れるまで働いておいて朝はもう二時ごろから起きて大根の車のあと押しをして市場へ出るのである。

市に近づくに従って空気の濁って来るのが目にも鼻にも感じられた。風のない市の上空には鉛色の煙が物すごくたなびいていた。

もしも事情が許すなら、私はこの広い平坦な高台の森へいたん

影の一つに小さな小家を建てて、一週のうちのある一日をそこに過ごしたいと思ったりした。これまでいろいろのいわゆる勝地に建っている別荘などを見ても、自分の気持ちにしっくりはまるようなものはこれと言って頭にとどまっていけない。海岸は心騒がしく、山の中は物恐ろしい。立派な大廈たいかこうろう高楼はどうも気楽そうに思われない。頼まれてもそういう所に住む気にはなれそうもない。しかしこの平板な野の森陰の小屋に日当たりのいい縁側なりヴェランダがあつてそこに一年のうちの選ばれた数日を過ごすのはそんなに悪くはなさそうに思われた。

ついそんな田園詩の幻影に襲われたほどにきょうの夕日は美しいものであった。

長い間宅うちにばかりくすぶっていて、たまたまこのよい時節に外の風に吹かれると気持ちはいいようなもの、あまりに美しい自然とそこにも付きまとう世の中の刺激が病余の神経には少しききすぎるようでもある。もうそろそろ寒くはなるし、写生行もしばらく中止していよいよ静物でもやり始めなければなるまいと思っっている。

（大正十一年一月、中央公論）





日本文学電子図書館

---

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店  
昭和45年8月20日 第38刷発行

---



日本文学電子図書館